

殺され半蔵

野村胡堂

一

「平次、少し骨の折れる仕事だが、引受けてはくれまいか」

若い与力よりきの笹野新三郎は、岡っ引風情の銭形平次に、こんな調子で話しかけました。

「口幅つたいことを申すようで恐れ入りますが、お頼みとあれば、どんな事でも、旦那」

先代から厄介になっている銭形の平次にしては、首をくれと言

われても、断られた義理ではありません。それに平次も笹野新三郎おとに劣らず、若さと覇氣はきと、感激性を持っていた頃のことです。

「ほかではない——、先程一人の老女が訪ねて来て、大變なことを頼んで行ったのだ」

「へエ——」

「四谷北町の小永井鉄馬殿、二百五十石を食はんで、安祥旗本あんしょうの有名家柄だ——、その方が中風で、弟の滝三郎というのが後見をしているが、どうも面白くないことがある」

「へエ——」

「というのは、鉄馬殿は公儀へお届け済の病人、半身不随ふずいで身動

きも自由でないのを幸い、手の付けようのない放蕩者ほうとうもので一時勘当までされた、弟の滝三郎父子が乗込み、兄の鉄馬殿を、土蔵の中に押し込めて、犬猫のようなひどい目に逢わせ、自分が兄の家を乗っ取って、倅文五郎に跡を継がせるつもりらしいと言うのだ」

「へエ——太え野郎ふてがあつたもので」

「私のところへ来たのは、鉄馬殿の娘浪江を、藁わらのうちから育てた、加世という乳母で、用事にかこつけて、土蔵の中に入り込み、直々鉄馬殿に頼まれて、ここまで隠れてやって来たというのだ——」

「へエ——それは気の毒で御座いますが、旗本のお家騒動を、町

方へ訴え出るのは、少し筋違いじゃ御座いませんか」

「その通りだ。私も旗本は若年寄の支配で、町方与力では手の出しようがないと言うと、鉄馬殿も、それは百も承知だがこれが間違つて公儀の耳に入ると、小永井家は、家事不取締で断絶になる。

鉄馬殿にしては、それが何より心配だ、幸い私の先代が鉄馬殿と、うたいもだち 謡友達、ご 碁友達という以上に懇意で、ぼくぎやく 莫逆の念いがあつたから、

その友情にすが 縋つて頼みたい——とこう乳母の口から言われるの

だ。弟の滝三郎は武芸も学問もないが、かんち 奸知だけは人の三人前も

あるから、何をやり出すかわからない。あとに案じられるのは、年頃になつた娘の浪江、筋違いは百も承知だが、町方の手で何と

かして、若年寄や、大目付の耳に入れずに、滝三郎を取って押え、私を土蔵の中から救い出してくれれば、それに越した喜びはないと言うのだ。平次、何とか工夫はないものだろうか」

全くこれは折入つての頼みでした。笹野新三郎、思わず膝を進めて、敷居の外にうづく踞まる平次の手を頂きたいような様子です。

「旦那、よく解りました。何とか一と工夫やつて見ましようが、相手は旗本屋敷と言うと、うっかり手は出せません。暫くお待ち下さいますように」

平次は思い定め兼ねたような、むずかしい顔を挙げました。が、
「何とかやつて見ましよう——と言う以上は、事件の解決まで、

決して手を緩めゆるない平次の日頃をよく知っている新三郎は、もうすっかり大舟に乗った気持で、この捕物の名人と謳うたわれた男の顔を頼母たのもしく見詰めました。

二

しかし、この時ほど平次も縮尻しくじったことはありません。手っ取り早く言えば、小永井家に入り込む工夫も何もつかぬうち、肝腎かんじんの生証拠の老女加世は死体になってしまったのです。

それは、八丁堀の役宅に、与力笹野新三郎を訪ねた翌る日の晩

でした。にわかほつき遽の発作で、町内の医者も間に合わず、息を引取ってしまいました。水で頭を冷したので、枕も毛もぐっしより濡れている外、どこにも異状はなかったので、たけのこあん筍庵先生の見立ては卒中ということ、深く詮索する者もなく、猫の子のように手軽に葬ほうむられてしまいました。

もつとも、加世の倅の半蔵というのは、同じ屋敷に中間奉公をしております。これは一克者こくものの母親と違って、恐ろしい道楽者、酔えば必ず大地に引つ繰り返って、サア殺せ——とわめくので『殺され半蔵』と綽名あだなを取った男です。母親が永年忠勤を励んだお蔭で、持て余されながらも首にもならず小永井家に飼いごろさ

れておりますが、その日も陽のあるうちから飲み廻って、母親の死目にも逢わないという情けない有様です。

それから又幾日か経ちました。或る日、四谷の小永井家を、ひそかに見張らせている、子分のガラッ八が帰って来て、

「ネ、親分、妙な事がありますよ」

キナ臭い顔をしております。

「何だい、八」

「こんな事を言うと親分に笑われそうですが、現にこの私も聞いたんで——」

「なんだい、それは。早く言ってしまうな」

「笑っちゃいけませんよ、怪談なんですよ」

「フム、面白そうだな」

平常、怪談ばなしなどには、耳も傾かたむけない平次ですが、よくよく手掛りが欲しかったものか、不思議に乗気になって、ガラッ八を促します。

「小永井の屋敷から、毎晩女の悲鳴が聞えるって、町内は大騒ぎですよ」

「フーム」

「乳母さんが死んだばかりだから、多分お化けだろうって言いませんが、誰も姿を見たわけじゃありません」

「手前も聴いたのか」

「昨夜聴きましたよ、彼れこれ亥刻よつ（十時）過ぎでしたが、町内の物好きな人達と一緒に、路地を入れて、小永井屋敷の塀の外にいと、泣くような怨むうらような、何とも言えない女の悲鳴が——」

「身振りまでしなくたっていい」

「朧月おぼろづきで、生暖かい晩、あんな声を聞かされちゃ全くたまりませ
ん」

「声の元を突き止めたかい、潜り込むとか何とかして——」

「そんなわけには行きやしませんや、相手は旗本屋敷で、下手に潜り込んで見付かると、無礼者ツと来る」

「お化けに手討にされるのが怖かったんだろう」

「へッ、冗談でしょう」

ガラツ八をからかいながらも、平次は深々と腕を拱こまぬきました。
この間から集めた、いろいろな情報を頭の中に纏まとめて見ると、何かしらそこに、捨て置き難い重大性が匂います。

「ガラツ八、今晚一つ付き合わないか」

「へエ、どこへ」

「馬鹿だなア、飲む話じゃねえ、化物退治だよ」

「へエ」

その晩、四谷北町の小永井家の塀の外へ行つた、平次とガラツ八は、わざと町内の人目を避けて、八軒町の方から、行止りの袋路地を、屋敷の横手へ廻つて見ました。

草も林も茂り合つた、千坪に近い屋敷で、ここまでは手が廻らなかつたか、塀も築地ついでも崩れて、野良犬の真似をすれば人間が潜れ込めないこともありません。

「八、ここから入るんだ」

「大丈夫ですか、親分、見付かったら百年目ですぜ」

「馬鹿だなア、相手は旗本だと思つて遠慮もあるが、当主は病人で、威勢を揮っているのは、遊芸より外には何にも知らない弟の滝三郎と、その倅せがれの文五郎という役者みたいな男だ。見付かつたつて命に拘かかわるような事はあるものか」

「成程ね」

二人は小声で無駄を言いながら、寺の裏を通つて、木立の奥へ深く入つて行きました。物が皆んな銀鼠に見えるような、朧おぼろの桜月夜、女の悲鳴が聞えなくとも、何となく怪談めかしい道具立です。

「親分」

「シッ」

ガラッ八は、何時の間にやら平次の袖を押えておりました。

「あれですよ、——あの声ですよ」

「——」



平次も気が付いておりました。木立の向う、屋敷の裏手のあたり、月の光が淀よどんだように、青白く見えるのは、多分咲きかけた桜でしょう。丁度その中から、世にも物悲しい女の泣き声が、苦悩に引千切られながら、絶え絶えに聞えるのでした。

「親分、あれですよ」

「黙らないか、八」

言い甲斐もなく胸どうぶる顫いするガラツ八の手をふりもぎつて、平次は忍び足に、その声の方へ近付きました。

「大丈夫ですか、親分」

「あれは、お化や狐なら驚きはしないが、人間だよ、——それも

若い娘の声だ」

「へエ——」

二人は四つん這いにならないばかり、絶対に蹠音を忍ばせて、
どうやらこうやら木立の外へ出ました。

海の底のような、真珠色しんじゆいろの朧ろ月夜。

半開の桜の下に、ハネ釣瓶つるべが見えて、井桁いげたの下に、何やら白い
ものが踞うずくまっております。

「娘だッ、親分、あれが浪江という娘ですぜ、そりゃア美しい——」

「シッ」

耳元に囁くガラツ八を払い退けるように、平次は尚も四方を見廻しました。

幸い木立の尽きるところから、少し廻ると物置の裏へ入って、井戸の直ぐ側まで、その庇が延びております。

二人はもう躊躇ちゅうちよしませんでした。

四

「浪江、少しは懲こりたか」

庭下駄の音がして、井戸端へ物影が射します。叔父の滝三郎が、

庭木戸を開けて出て来たのでしよう。

「――」

娘は泣き声を吞みました。

桜の間から落ちる月の光が、井桁いげたに縛られた娘の身体を、人魚のように青白く照しております。

ここまで見届けると、平次とガラツ八は、思わず庇の影に眼をそらせました。娘の身体が白々と見えたのは着物や光線のせいではなく、半裸体にされて、犇々ひしひしと荒縄に縛り上げられているためだったのです。

振り乱した髪が、美しい顔から首筋へ海藻みるの如く絡からんで、真珠

色の凝脂ぎょうしが、ヒクヒクと荒縄の下に蠢うごめく様は、言いようもない、恐ろしい魅惑みわくでした。

「浪江、まだ首を振るか、——わけの解らぬ奴だ」

「——」

「兄上はあの通り、明日をも知れぬ命だ。取急いで祝言の盃をし、公儀へお届を済まさなければ小永井の家に疵きずが付く——、文五郎もそのつもりで、すっかり用意を整えているのに何が気に入らなくてお前は頭かむりを振るのだ」

五十がらみの、武士とも町人ともつかぬ男——、旗本の次男に生れて、一度はやくざに身を持ち崩したのが、中年過ぎてから武

家に舞い戻って、欲ばかり深くなつたと言つた心持が、姿にも、顔にも言葉遣いにも現れております。

「外に言い交した男でもあると言うのか」

「――」

浪江は縛られたままに、首を振りました。

「それとも、文五郎が気に入らぬと言うのか」

「――」

今度は娘の首が真つ直ぐに起つて、それを否定しようともしま
せん。

「どうだ、浪江、返事をせぬかい」

「あの、父上様が、はっきりお許し下されば」

わななく声、涙に濡れて、苦痛に歪め^{ゆが}られて、僅かにこう聴き取れます。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、兄上は中風でろれつも廻らない有様だ、許すも許さぬもない」

「いえ、それでも」

「馬鹿な事を言うのは、好い加減にするがいい。後見のこの叔父が言いつけるのだ、病人などを引合に出すことはない」

「――」

「どうだ、浪江、返答を聞こう。次第によっては、明日にも祝言

をさせ、——いや祝言より先に、親類方の同意を得て、公儀へお届を済ませなければならぬ。異存はあるまいな」

「いえ、叔父上様、厭で御座います。父上様直々のお言葉がないうちは——」

「どうしても強情を張る気か」

「——」

「仕方があるまい。もう一と責めだ」

滝三郎はハネ釣瓶つるべを鳴らして、一杯くみ上げました。

「浪江、少しは涼しいぞ」

頭の上に高々と翳した釣瓶つるべを覆すと、颯さつと銀色の滝が、娘の頭

上へ——。

「アッ」

浪江は流しの板の上へ叩きのめされました。一杯の水が、処女^{おとめ}の全身を洗って、乱るる黒髪も、青白い身体も、紅い腰巻も、その儘湧き上りそう。

それを見ると、たまり兼ねたガラツ八。

「己れッ」

物置の闇から飛出そうとするのを、平次は大骨折で羽搔^{はがいじめ}締にし
ながら、

「馬鹿ッ、黙って見るんだ」

一生懸命に囁きます。

五

続いて二杯三杯。

娘は飛瀑たぎに打たれた女行者のように、流しの板に崩折れて声も

立てずにのた打ち廻ります。荒縄に縛り上げられて、濡れた処女

の肉身が、ヒクヒクと痙攣けいれんする様は、艶なまめかしくも痛ましいもので

したが、五十男の欲の深そうな滝三郎には、そんな情緒が動きそ
うもありません。

五六杯浴びせると滝三郎は、疲れを休めるともなく、流しの上に立って、娘の顔を覗きました。

「どうだ浪江、今度は痛い目に逢うぞ」

なるほど、かねて用意をしたものか、後ろ腰から馬の鞭むちを抜いて、後手に構えております。

これほどの騒ぎにも、奉公人一人顔を出さないのは、多少言い含められているのでしょう、桜の下は苦惱くのうに喘あえぐ娘の泣き声ばかり、町内にお化け騒ぎをさせた裏悲しさで、夜の空気に断続しております。

「浪江、まだ承知せぬな、しぶとい女だ」

滝三郎の手には、高々と鞭むちが光りました。

「あッ」

一つ、二つ、処女の肉ししむらに小気味よく鳴ると、それを切っかけの
ように、

「父上、暫らく」

庭木戸を押し開いて飛出した者があります。田舎芝居の二枚目
と言った、顔も、身体も、瓢箪ひょうたん型の男、バタバタと庭下駄ふさの音を
させて、井戸端へ飛付くと娘を後ろ身にかこつて、立ち塞ふさがりま
した。

殺され半蔵

言う迄もなく、滝三郎の一子文五郎、妙に芝居染みますが留男

振りは、兎に角すつかり板に付きます。

「邪魔立てするな」

「いえ、父上様、浪江殿が可哀そうで御座います」

「退け退け」

「打つならどうぞ、私を打つて下さい」

水と鞭とに打ち挫くじかれた半裸体の娘を、好ましそうに覗きながら、父の鞭から庇かばって、文五郎は兎に角声を絞りました。

「えッ、聞きわけのない」

「あッ、父上様」

六

「親分、このまま黙って帰るんですか」

「そうだよ」

「あの父子に馬鹿な芝居を見せられて、指を銜くわえて引下がるんですかえ」

「いやに、絡からんだ言い方だな、八」

「なに、そう言う訳じゃありませんが、あんまり業腹ごうはらだから、親分が黙って見ていて下さりゃ、あつしが飛出して、あの二人を退治した上、娘を引担いで逃げ出しますよ」

「馬鹿、あれは旗本の屋敷内に起つた内緒事だ。ないしよごと町方の御用聞が、そんなお節介をしたら、唯じゃ済むめえ」

「だって、親分」

「それが、平次のしたことと判つて見ねえ、入知恵をした与力の笹野様をはじめ延ひいては御奉行朝倉様の御迷惑になるだろう」

「――」

「それとも、旗本の屋敷へ、物盗りのように忍込んで、娘を誘拐ゆうかいした罪を、手前一人で背負つて立つか――」

「そんな事は、親分」

「まア、いい、時節を待て」

平次とガラツ八は、こう言いながら、表町の通りを歩いておりました。

北町、表町というと、今の赤坂ですが、昔はこの辺を一円に四ツ谷と言ったもので、江戸の切絵図きりえずには、千駄ガ谷へかけて四ツ谷の部に入っております。

「ところで八、死んだ乳母うぼの倅の『殺され半蔵』というやくざな仲間が、毎晩この辺を飲み廻っているとか言ったな」

「滝三郎が入り込んでから、誰もとがめ手が無いのと、お袋が死んで少し自棄やけになったんでしよう。三文賭博ぼくちを打つ元手のない時は、この辺の飲屋を門並み荒して歩いていきますよ」

「そいつを探して見ようじゃないか」

「わけはありません」

二人はそれから、二三軒縄暖簾なわのれんを漁あさると、全くわけもなく見付かかってしまいました。

当の『殺され半蔵』は、とある飲屋の奥に、樽たるてんじん天神を極め込んで、拳骨げんこつに付けた塩を舐なめながら、湯呑で熱いのをキューとやっていたのです。

「兄あにい、好い機嫌だネ」

ガラッ八は横へ廻つて、ポンと肩を叩くと、

「何を言やがる、手前てめえが奢おごった酒じゃあるめえし、好い機嫌だつ

て悪い機嫌だつて、文句を言われる覚えはねえ、すつ込んでいやがれ、丸タン棒奴」

どうも恐ろしく悪い口です。

年の頃は二十五六、顔も胸も酒に焼けておりますが、一寸苦味走った好い男、水髪みずかみの刷毛先はけさきを左へ曲げて、人を睨み上げると、少し三白眼さんぼくがんになります。

「少し話があるんだ、すまねえが兄イ、ちよいと顔を貸してくれ」
「人に貸すような器用な面じゃねえ、退きやあがれ、おべっかなんか使やがったつて、酒は飲ませねえぞ、間抜け奴」

とても寄付けません。

黙って見ていた平次は、ガラツ八を掻き退けるように、半蔵の側へ寄りました。

幸い店の中には誰もいません。

「兄イ、小永井様の屋敷に、お化けが出るって話を知ってるかい」
「何？」

と半蔵。

「お前、それじゃ死んだお袋に済むめえぜ、桜の下の井戸端に、娘が毎晩裸はだかで縛られて、息も絶え絶えに責められているのも知らないようなこつちゃ——」

平次の言葉は、低いが恐ろしい効果を現しました。

「それは本当か——、お前は一体誰だ」

少し眼は据すわりますが、酔いもいくらか醒めたらしく、天神様の足をほぐして屹きつとなります。

「誰が嘘をつくものか、破れた塀の間からもぐって、すまねえが、責め場を見て来た者があるんだ。あの儘放って置くと娘は死ぬぜ」

「フーム」

「あの悪党が、鞭むちで娘を叩いたり、顔から水をぶっ掛けながら倅いっしょと夫婦いっしょになって、この家の跡を取れと言うんだ——皆んな聴いたよ、目出度い話さ」

「従いとこ兄妹同士の夫婦が一組出来上がって、小永井の家は千秋万歳さ、——とところで、伴があの子の家の跡を取ると邪魔になるのは土蔵に押し込められている年寄だ。公儀の届が済めば三日たたないうちに、軍しゃも鶏のように締められるよ」

「そんな、そんな馬鹿な事があるものか。お前は、誰だ、畜生ッ」
「馬鹿だか馬鹿でねえか、四つの眼で見て帰ったんだ。物は試し、屋敷へ帰って井戸端を覗いて見るがいい。若い娘があられもない姿で縛られていたら、俺の言うのが本当だと思え。お主しもうの大事も忘れて、酒ばかり飲んで歩きやがって万一あの娘が死んだら、手前は腹でも切らなきやア済むめえぜ」

平次の言葉は、囁き加減ですが、噛んで含めるように、半蔵の肺腑はいふに喰い込んで行きました。

「畜生ッ、どうするか見やがれ」

半蔵は、湯呑を土間に叩きつけると、スックと立ち上がりました。

「急いで行って来い。二三人打ちのめしても構わないから、娘を引っ担いで来るんだぜ」

「手前達もここを動くな」

と半蔵。

「いいとも」

半蔵は外へ出ると、少しよろめく足を踏みしめて、北町の方へ、颯と飛んで行きます。

「あッ、勘定は？」

奥から飛出す親爺を、

「放って置け、勘定は俺が払ってやる」

平次は大手を拡げる形に止めました。

「親分、どんな事になりましたよ」

とガラッ八。

これは半蔵の消え込んだ闇を何時までも見詰めておりました。

「お嬢様ッ」

井戸端で、半裸体の娘を抱き上げた時は、半蔵も、さすがに酔いが醒めてしまいました。この悩^{なや}ましい情景は、呑^シんだくれの半蔵にとつても、あまりに、痛々しい刺戟^{しげき}だったのです。

「お、半蔵か」

僅かに正気付いた娘は、何より先に、浅ましい自分の身体を見廻しました。が、何時の間^はに掛けたか紺の匂いのする絆纏^{はんでん}が、荒縄の上から引っ掛けられて、裾へは紅い腰巻が、月の光に、黒ず

んだ濡れ色を見せております。

振り仰ぐと、抱き上げた方の半蔵が、掛け守袋まもり一つの逞しい裸体になり、白木綿の腹巻の後ろ帯に、木刀を叩き込んで腰を切ろうとしているところでした。

「お嬢様、気が付きましたか。何て、虐むじつたらしい事をしやがるんだろう——」

半蔵はそう言いながら、絆纏に包んだ処女おとめを、宝物のように引っ抱えて、裏口の方へ足を移しました。

「半蔵、どこへ行くの？」

浪江は、寒さにわななきながらも、月の光に半蔵の行方をすか

します。

「知れた事でさア、こんな屋敷をオン出て、安心なところへ隠して上げますよ」

「それはいけないよ半蔵、私がいなくなったら、父上様がどう遊ばすだろう。どんな事があつたって私は、ここを動かない」

「飛んでもない、お嬢様があの方五郎の野郎と祝言すると、三日経たないうちに旦那様が殺されますぜ」

「えッ」

「妙な男が私にそう教えたが、どうも、こいつは凶星のようだ」
「それでも、私は父上様を見捨てる気にはなれない」

「弱ったなア」

殺され半蔵も、脇の下で、縛られたまま藻搔もがく娘を持て余すともなく、暫く立ち止りました。

「そんな事を言ったって、お嬢様、ここにジツとしていたら殺されるか、祝言するかだ」

「いけないよ、どうしても私を連れ出そうと言うなら大きい声を出して人を呼ぶよ」

半蔵もこの上争うわけに行きません。丁度立止ったところが土蔵の前、父親の鉄馬を閉籠とじこめている場所と気が付くと、

「それでは、旦那様に伺って見ましよう、土蔵の窓は開いてるよ

うだから」

庇の下に入つて、鉄網てつあみを張つた窓から声を掛けようとする、
「半蔵、何も彼も聞いた、娘を頼むぞ、——浪江もここを出て、
時節を待て、私の事は心配するな」

嚴重な鉄格子すかに縋すがつて、髯だらけの顔が半分、闇の中ながらほ
の見えます。

「父上様」

浪江は半蔵のこわき小脇こわきに身を顛ひわせて、ヒタ泣きに泣き入るばかり
です。

浪江は、半蔵と一緒に、暫く神田の平次の家に隠れました。小永井家は、旧家にしては親類も少なく、こんな時、打ち明けて力になつてくれる程の人もなかつたのです。

しかし、平次の目算もくさんにも、飛んだ思惑違ひがありました。浪江を盗み出して、文五郎との祝言さまたを妨げさえすれば、父鉄馬の命は大丈夫と思つたのは大違ひで、多知多策たちたさくの滝三郎は、

「小永井家の一人娘浪江は、乳兄妹の中間半蔵と駆け落をした」と言い触らし、半蔵や浪江を、動きの取れぬ羽目に追い込んだ上、

三日経たないうちに、

——当主鉄馬は、娘の不始末を悲しむの余り卒中を起して死んだ——と発表したのでした。

間もなく、親類合議と言う形に拵え、甥おいの文五郎に、跡目相続を願い出ました。その手順は如何にも疾風迅雷的しつぷうじんらいで、相手に息もつかせません。

安祥旗本の立派な家柄と、祖先の手柄を細々と歎願書に書き添えたのですから、公儀もこれは、先ず許す方に傾くでしょう。大名と違って、旗本の死後相続は、何でもないことではあり、それに弟の滝三郎では世間が許しません、その倅の文五郎となると、

いくらか大目に見る心持になります。

「これは放って置けない」

銭形平次も今更驚きましたが、自分の料簡一つでやった事で、この始末を笹野新三郎に持って行くわけにも行かず、又持つて行つたところで、旗本の名家の相続問題に、町方与力などはくちばし嘴を容れられるわけありません。

半蔵も、浪江も、平次の心持や行状を見て、すっかり信頼し切つているこの頃です。今更「駄目だった」とは、平次の舌が腐くさつても言われた義理ではなかつたのです。

「半蔵兄あにい、済まねえが一肌脱いじゃくれまいか」

事件が切迫した或る日、平次は思い入った様子で、こう言いました。

「何をやらかしゃいいんだ、親分」

半蔵もさすがに平次の緊張した顔に引入れられて、やぞう弥造のげんこつ拳骨を出して、素直に顎を撫でます。

「兄貴、あにきお嬢さんや、小永井家のために、命を投げ出しちゃくれまいか」

と平次。

「へエ——」

「手っ取り早く言えば殺されて貰いたいんだ」

「なんだ、そんな事か、——殺され半蔵と言われている俺だ、自慢じゃねえが、命だけは糸目をつけねえ」

「本当か、兄貴」

「殺されつけているんだ、心配することはねえ」

冗談だか真面目だか分かりませんが、ケロリとした顔には思いの外真剣な色が動く様でもあります。

「兄貴のお袋さんと、小永井の旦那は、どうも、滝三郎親子に殺されたに相違ねえが、証拠と言うものが一つもねえ。町人や百姓なら見込で縛って、引つ叩く術てもあるが、相手は旗本屋敷に住んでいちゃ、冷飯食いでも、まさかそんな手荒なことは出来ない」

「で、兄貴が乗込んで行って、平常の術で存分に啖呵を切って、思い切り厭がらせを言うんだ」

「そいつは有難てえ、俺は溜飲りゆういんを下げたくてウズウズしているんだ。あの悪党親子の前でフンぞり返らしてくれるなら、命なんか二つ三つ投げ出してもいい」

「そう来るだろうと思つたよ。だが、こいつは冗談や洒落しゃれじゃない、乗込んで啖呵を切ったら最後、間違はなく殺されるぜ」

「いいとも」

「その殺し振りを、俺は陰かげながら見たいんだ。兄貴のお袋さんも、

小永井の旦那も、卒中と言うことになつてゐるが、二人共髪がグツシヨリ濡れてゐたつて言うし、頭てっぺんの天頂には少しばかり黒血が溜つていたそうだ。どうも俺には腑に落ちないことばかりなんだ。どうして殺したか解りさえすりゃ、仇はキツと討つてやる」

「殺された上に、仇まで討つて貰つちや濟まねえな」

何と言う太平楽、半蔵はこんな事を本気で言つてケロリとしております。

「その代り、向うへ行つた以上は、存分にやつてくれなくちやいけないんだぜ」

「いいとも」

殺されに行く相談を、隣の室では浪江が、袖を噛んだり、頬を
押えたり、立つても坐つてもいられない様子で聴いておりました。

九

「やい、あの人殺し野郎の唐変木とうへんぼくはいるかい」

半蔵が小永井家の大玄関から怒鳴り込んだのは、その日の夕刻。

「あッ」

取次の用人は、半蔵の顔を見ると奥へ逃込んでしまいました。

女中はしため端女等は、元より寄付けません。

「半蔵が逢つて文句を言いに来たと言えッ。親父おやじの人殺し野郎と、倅の色気狂野郎を並べて置いて、土手つ腹へ風穴をあけてやるんだ」

半蔵は無人の境を行くが如く、部屋から部屋を漁あさつて行きました。

「俺のお袋と旦那様を殺したのは、何奴どいつだ、出て来やあがれ」
旗本屋敷には相違ありませんが、滝三郎も文五郎も無類の柔弱者で、元より半蔵ほどの者を押える気力もありません。

「まア、まア、半蔵、何をそんなに騒ぐんだ」

それでも見兼ねたか、滝三郎は笑みこぼれそうにニヤニヤしな

がら出て来ます。

「ヤイ、この野郎、お嬢様を水責みずぜめなんぞにしやがって、その上この家に乗っ取ろうてんだらう。侮の眼玉が黒いうちはそんな事をさせるもんか。お袋と、旦那様の仇を討ちに來たんだ、覚悟しやがれ」

半蔵は腹巻を探つて、あいくちヒ首を取出すと、鼠を狙う猫のように身構えました。

「危ねえ、そんなものを抜いちゃいけない、半蔵、気を鎮しずめてよく聴いてくれ、——実は、お前の來るのを待っていたんだ」
「よくよく打ち殺されたかつたんだらう」

「そうじゃない、浪江に跡を取らせたいばかりに、俺はどんなに気をもんだか知れやしない。浪江の在処ありかさえ判れば、俺は倅を伴れて、ここを出て行く、嘘も偽りもない」

「本当か、野郎」

「浪江に悪い噂が立って、俺はどんなに心配した事だろう、小永井の家を潰しちゃ、先祖様に対して済まないから、無理な献立も、拵えたが、お前と浪江が出て来さえすれば、俺と倅は、この家に用事はない、半蔵、間違ったことをしてくれるな——」

滝三郎は真まことに畢生ひっせいの弁舌ぶんぜつを揮ふるいました、正直者の半蔵は、何時あいくちの間まにやらそれを信用する気になって、ヒ首あいくちを腹巻あいくちに納めると、

ドツカと座敷の真ん中に、坐り込んでしまったものです。

十

その晩、半蔵はすっかり好い心持になつてしまいました。駕籠を仕立てて、浪江を迎えにやらせるとへエコラする滝三郎と文五郎を下目に見下^{みおろ}して、納戸にとぐろを巻いて、平次のこと、殺されに來たことも忘れていたのです。

「半蔵さん、お風呂は？」

^{かおなじみ}顔馴染の女中が、そう言つて來ると、少し酔の廻つた半蔵は、

フラフラと立ち上がりました。風呂と聞くと我慢の出来ない半蔵は、少し酔っていることなどは考えていません。

雇人の風呂場ではなく、家族の風呂場へ案内されて、一度はハツと気が付いたようでしたが、すっかり好い心持になっていた半蔵は、思い直して、少し酔った身体を風呂桶の中へ漬かりました。しかし、これが重大な罠わなでした。半蔵が風呂桶に全身を浸ひたすと、どこから現れたか滝三郎、

「どうだ半蔵、湯の加減は？」

「え、丁度いい塩梅あんべえで——」

半分も言わせず、風呂桶の蓋ふたを取るとパツと半蔵の頭上へ。

「何をしやがるんだ」

飛上がろうとしたがいきません。蓋の一方の端は俵の文五郎が押えて、風呂一杯の湯の中へ、半蔵をめり込ませてしまいました。

そこへ、平次とガラツ八が飛出したことは言う迄もありません。ガラツ八が半死半生の半蔵を風呂桶から助け出す間に、平次はわけもなく滝三郎を取って押えました。人殺しの現場を押えられたのですからこれに弁解の余地もありません。

ドサクサまぎ紛れに、文五郎は逃げましたが、滝三郎は小永井家から人別を抜かれたままになつていたので、縄を打って、その場か

ら引つ立てました。あとはもう話はありません。浪江には遠縁の者から婿養子を容れて、滝三郎の処刑がすむと、祝言の盃おしおきを挙げさせました。

笹野新三郎や、平次の骨折で、家督相続も滞りなく運び何もかも目出度ずくめになってから、

「親分、いろいろお骨折で有難う御座いました。あつしは用事も済んだようだから、暫く旅に出て来ますよ」

殺され半蔵は、不意にこんな事を平次に言いました。

「どうしたんだ、新夫婦が、これから兄貴あにきに恩報じをしようと言
う相談をしているよ」

「思召しは有難いが、こんなやくざな野郎がいちや目障りめざわだろう、
——それに、あつしにしても、美しい新嫁振りを見せつけられち
や、たまらねえ、親分止め立ては殺生だぜ」

半蔵はこう言つて、クルリと背そびらを見せました。それつきりこの
男はどこへ行ったかわかりません。人にも言えぬ淡い恋心を抱い
て、酔つ払つては『サア殺せ』をやつて歩いていくことでしよう。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

殺され半蔵

初出―「文藝春秋オール讀物號」昭和七年三月号 文藝春秋社

殺され半蔵

底本―「錢形平次捕物全集」第一卷
河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>